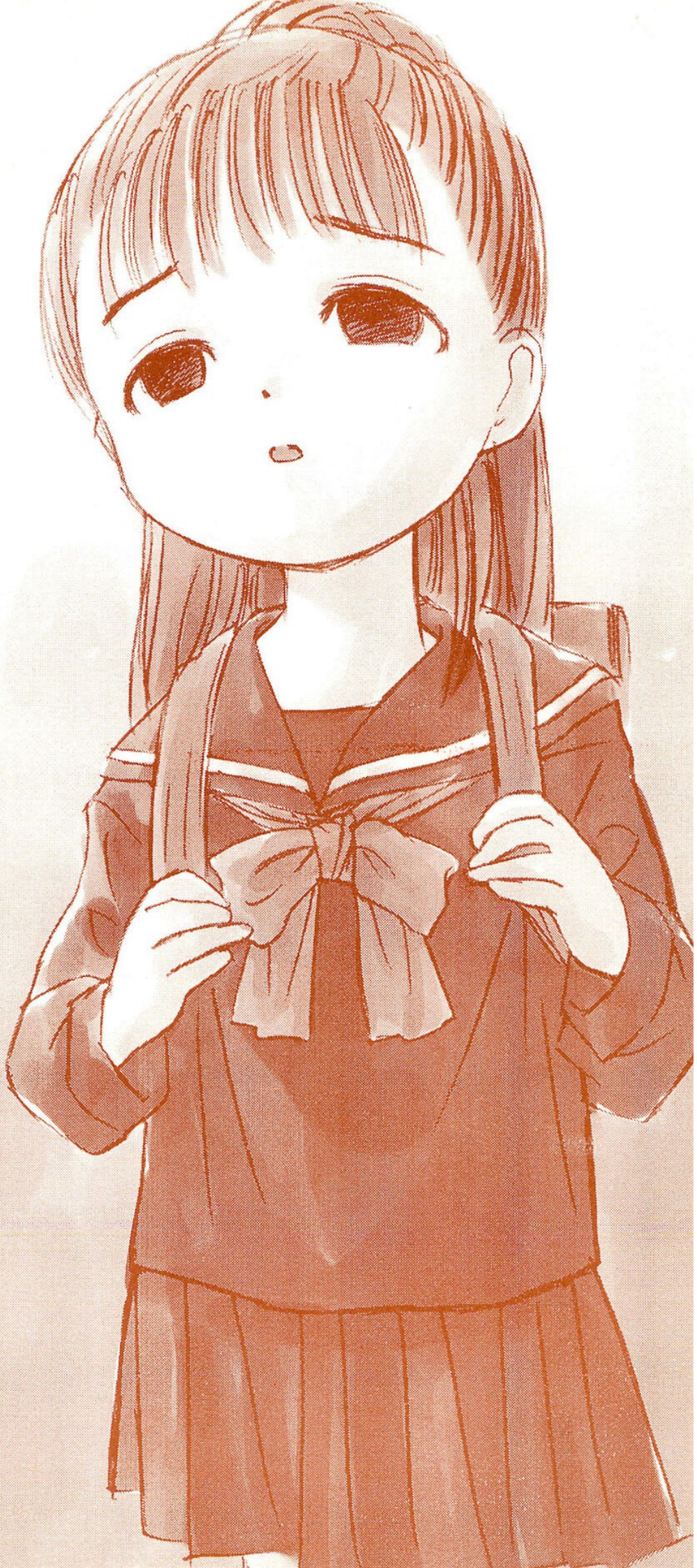
ろりぽん10



For Adult

ろくめん☆ろっぴ
&やまの屋本舗

▼今回は、田中由香という少女（セーラー服にポニーテイルの小学5年生）がとある事情で日常的に犯されてしまうという統一された設定でお送りしています。

それは、一年前。
少女は見知らぬ男たちに、
無理矢理連れ去られて輪姦されてしまった……。

「これだけ何度も犯しているとガキでも感じてくるんですかね？」
少女の身体は何度も男たちの陰茎によって貫かれ、口内を犯され、体中に青臭い精液をかけられながら体をビクビクと震わせていた。もう意識は空ろなのか一人の男が少女の口元に硬くそそり立った陰茎を宛がうと小さな舌先でその先端をちろちろと舐め始めてしまう。男はその微妙な刺激に歓喜の声を上げて体を痙攣させながら少女の口内を己の欲望のためだけに喉の奥へと差し込んでいった。
「オレもまた中にいれよーっと」
一人の男が少女の腰を乱暴に掴むと何度も膣内に出されたために小さな肉襞から溢れ出る精液を気にすることも無くそのまま陰茎を中に押し込んだ。少女の体は電気が走ったかのようにビクンと仰け反り嬌声を上げてしまう。
「やっぱりこいつこんな小さな体で感じまくってるぜ……。もうチンポの味が忘れられないはずだよな。へへへへ、今日はこのまま帰してまた色々と楽しもうぜ……」
その少女の異常な痴態を写真やビデオで収め、少女の手荷物にあったその個人情報を確かめるように手帳に写していた。

ドプッ
びくんっ
びゅっ
びくっ
ドクッ
びゅるっ
あっ
はぁっ

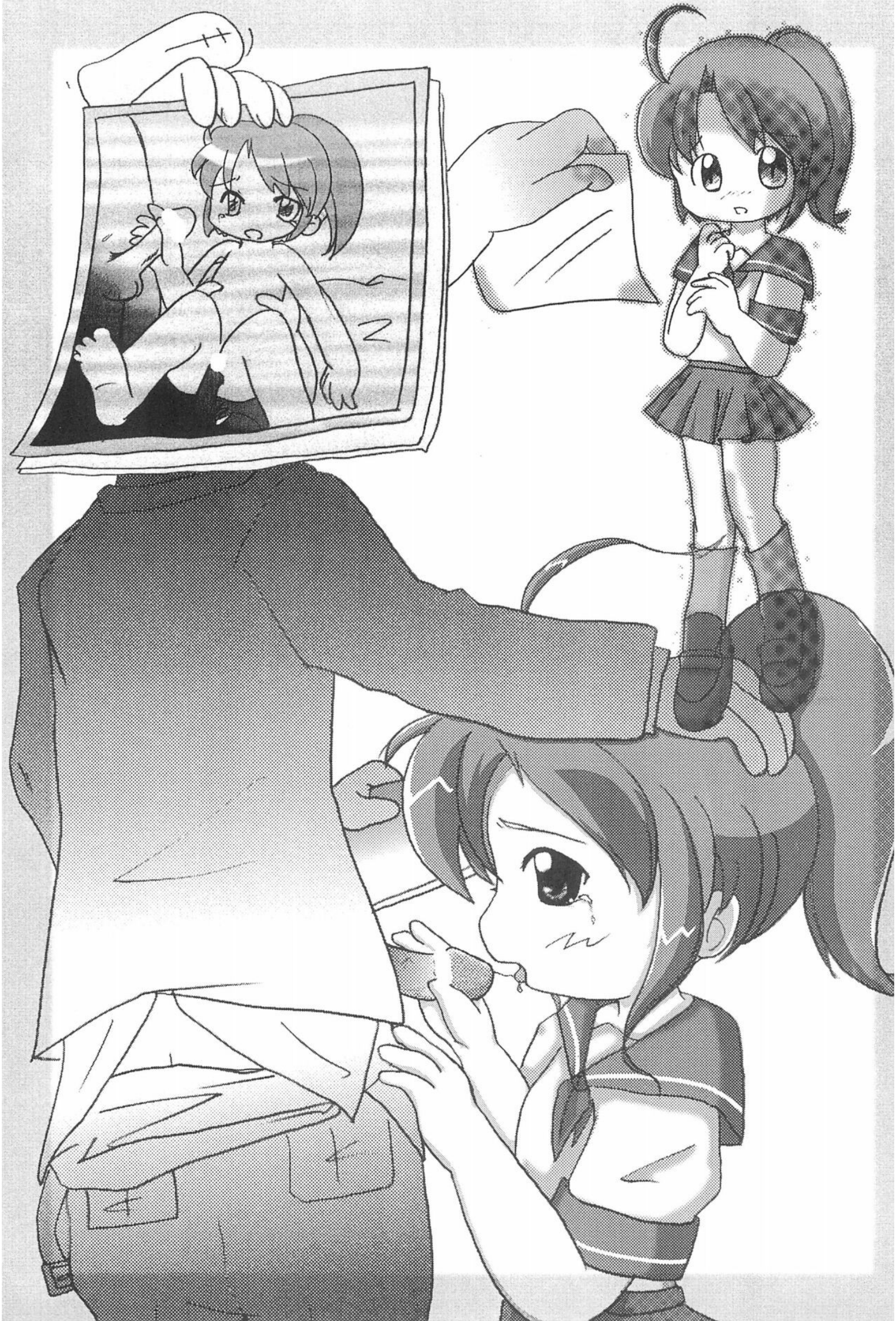
それから一年が過ぎ少女は再び普通の生活に戻り学校生活を過ごしていた。しかし、その小さな体の奥底には、一年前に受けた行為によって知らないうちに植え付けられてしまった快感の芽は少女の体の底でうごめき続けていた。

少女の関係無いところでそのとき撮影されてしまった写真と動画と少女の個人情報がインターネット上に流れてしまったのだ。その日以来、少女の身の回りには何人のも男たちが息を潜めながら見つめつづけていた。

そして、そのうちの一人の男が少女に声をかけたところから、再びそれが始まったのだ……。

1日目

「あ、君が田中由香ちゃんだね？」
男が学校から帰る途中の少女に肩をたたき声をかけた。
「えっ、そうですけど？何ですか？」
少女は振り返りいぶかしげな表情で男を見上げた。その男は品定めをするようにニヤニヤと笑いながら少女を頭からつま先まで舐め回すようにじっくりと見つめる。少女はその様子に恐怖を感じ後ずさりしながらその男から逃げようと駆け出そうとした。その瞬間男は少女の細い肩を強引に掴むと、数枚の紙を少女の目の前に突きつけた。それを見た少女は声を失いその場で凍りつくように固まり、体を震わせていた。
「へへ、これって由香ちゃんだろ？今、ネット上で有名だぜ……。本当にいるとは驚いたよ。この写真なんて、嫌がっているって言うより自分からたくさんのチンポを相手にしている感じだよね。スゲー気持ちよさそうな表情をしているしさ……俺のも相手にしてくれよ、舐めてくれるだけでいいからよ」
周囲に誰も人がいないのを確認すると少女の肩を抱いたまま人影の無い建物の小さな隙間へと連れ込んだ。少女は体を硬くしてその男についていくだけだ。
「ここなら誰もこないから大丈夫だよ……」
男はおもむろにズボンを下ろすと早くも獲物を捕らえようとするためか硬く反り返った陰茎を少女の顔の前に突き出した。少女はその異様な物体に小さな悲鳴を上げ腰をぺたんと下ろしてしまった。
「いや、やぁ……。もう、あんな事イヤなの……」
「何がイヤなんだよ。こんなに気持ちよさそうにしているのに？チンポが好きなんだろう？小学五年生の田中由香ちゃんはさあ！大人しく舐めれば許してやるからよ、俺はさ」
さらに男はその陰茎を少女の顔の寸前にまで突き出した。少女はその目の前でヒクヒクと息づく陰茎から逃れようと顔を背けた。しかし、男はそれを許さず少女の頭を押さえつけると強い口調で言い放った。
「さっさと、舐めるんだ！お前の事を狙っているやつはたくさんいるんだよ。お前が通っている学校や家や塾だってわかってるんだよ。一年前にお前が何をされてきたかだって知ってるんだ！お前がさっさとやらせなかったらお前の家族や友達だってどうなるかわからないぜ……。それでもいいんだったらいいんだけどな。こんなに嬉しそうにチンポ舐めていたくせによ、つまんねぇ意地を張ってんじゃねーよ」
少女は目に涙をためながら諦めたのかその硬く隆起した陰茎の先に小さな舌をちろちろと這わし始めた。その先端からは透明の液体が流れ少女の小さな舌と可憐な唇を汚していた。
「ああ、小学生が俺のチンポを舐めてるぜ……。たまんねぇや……、由香ちゃんもっと舐めてくれよ、空いている手も使うんだ。このまま可愛い口に出してあげるからね」
男の喘ぎ声と少女の嗚咽とぴちゃぴちゃと陰茎を舐める音が混じりあい淫猥な雰囲気を作り出していた。そして、それは男が満足するまで続いた。
「由香ちゃん、ありがとよ。すっげー気持ちよかったぜ。今日は口だけだったけど、これで精液の味を思い出してきただろ？これから毎日、誰かが由香ちゃんのことを襲いに来るから楽しみ待ってなよ。慣れてくれば気持ち良くなってくるだろうしよ。ああ、それからもしこのことを誰かに言ったら解ってるよな。お前の家族がどうなってもしらねぇからな。お前のことを抱けなくなったやつが何するかわからねえからよ。まあ、今まで通りに生活することだな」
吐き捨てるようにその場で顔を精液で汚し泣き崩れる少女に言い放った。少女はそれに答えることをもできず嗚咽を漏らし小さく頷くだけだった。



2日目

「ほーら由香ちゃん、こっちを向いて〜」
乱雑な一室で男がビデオカメラを少女に向けていた。少女は涙を流しながら男の指示通りにそのカメラのほうに体を向ける。男はいやらしい笑い声を出しながら少女をビデオカメラ越しに覗いた。少女は、シャツをたくし上げられスカートも下着も脱がされていた。
「足を開くんだよ、ほら、さっさとしろよ。」
少女は顔を赤らめながら足を広げ始めた。その淫猥な光景に男は思わずゴクリと唾を飲み込む。そして、すかさず少女に指示を出した。
「よし、そうだ。そうしたら、自分の指で開くんだ。一年前に何度もチンコを突っ込まれたマンコをこっちに開いて見せるんだ……」
少女はその指示にたじろぎ困惑の表情を浮かべる。
「そ、そんなの……出来ないよ……」
「いまさら何を言ってるんだ。昨日も知らない男のチンコ舐めてたんだろ。ネットに書き込みがあったぜ、田中由香は実在して俺のチンポを舐めてくれましたってよ。で、俺がこの辺歩いていたら本当にいるんだもんなびっくりしたぜ。さあ、さっさとやるんだ」
少女は斜め下に俯きながら人差し指と中指で自分の肉襞を広げその奥を見せた。
「このままじゃ良く撮れないから腰を前にせり出すんだ、早くしろよ」
少女は呻き声を上げながら腰をジリジリとせり出した。
「うう、いやだぁ……。もう許してぇ、お願い、恥ずかしいよお」
「いやだね。どうせ、いつもチンコを突っ込まれたことを思い出しながら毎日オナニーしてんだろ。今見せてみろよ、しっかり撮ってやるからよ」
少女は目を見開き男を見ると声を上げた。
「そんなのヤダ！ヤダよお……もう帰してよお」
「帰りたかったらさっさとやるんだ。オナニーの意味も解っているみたいだしやったことあるんだろう。さあ、早くやるんだ！」
少女を威圧するような声を上げた。その声に少女は体を縮みこませおずおずと自分の淫核に指先を這わせ始める。自分の指で与えた刺激に少女は体をびくんと震わせ軽く仰け反らせた。
「へへへ、いい感じだぜ……。もっと激しくやれよ」

「ふぁぁぁっ、あああ。もうもう……」
そろそろ限界が近いのだろう、少女はがくがくと体を震わせ体中を痙攣させ甲高い矯正を上げていた。自分の中に生まれて駆け巡る快感の波のためかビデオに撮られているのも忘れているようにも見える。絶頂を迎えようとしてさらに激しく指を動かしていた。その痴態を満足そうに撮影していた男は少女の腕をつかむと少女の耳元で囁いた。
「そ、そんなの……言えない……。あああ、許してぇ……」
「でも言わないとイけないし、帰れないよ。どうするさ？」
少女はその言葉に諦めの表情を浮かべぼそぼそと言い始めた。しかし、それは小さく聞こえるものではなかった。
「だめだ。もっとちゃんと聞こえるくらいに言えよ。そんなんじゃ意味ねえよ」
「うううう……。私の、私の、ここにオチンチンを入れて下さい！お願いします……」
「よく言えました。それじゃ、好きなだけ弄ってイっちゃいな」
少女の今まで焦らされたのと、その羞恥心のためか今まで以上に激しく指を動かしビクンと体を反らせその場に崩れ落ちてしまった。
「なんだ、もう果てちゃったんだ。すごく良かったみたいだねぇ。それじゃいい事教えてあげようか」
男は、肩で息をする少女の傍に寄って冷たい声で言い放つ。
「実はこのビデオカメラさぁあのパソコンに繋がっていてリアルタイムにいろんな知らない人が見ているみたいなんだよねー。由香ちゃんが自分で慰めながらオチンチン入れて下さい！って言うのも聞かれちゃってるんだよ〜。良かったね。皆が由香ちゃんの相手をしてくれるよ。小学生を犯せるなんてそうそうないことだからね。嬉しいだろ」

3日目

帰宅途中の少女の横に一台のワンボックスカーが止まりいきなりドアを開けた。
「君が由香ちゃんだろ？昨日見たぜ。オチンチンが欲しくてたまらない小学生なんだろ？ほらこっちに来いよ」
中から男は強引に少女の腕を掴むといきなり引っ張り込んだ。少女は一瞬の出来事に何もできずになすがままになってしまう。その中にはその男を含め二人の男がいた。そのうちの一人は早くも下半身を露出して己の劣情の高ぶりの塊の陰茎を扱き上気した顔で少女を視姦するように見つめていた。その異様な視線に少女はたじろぎ恐怖に慄いた。
「ああ、こいつな由香ちゃんと出来るって知ってからこんな感じで仕方がないんだよ。由香ちゃんの動画や写真で狂ったように抜いちゃってさぁ……。まぁ俺を含めて満足させてくれよ」
自分の陰茎を扱き続けていた男はいきなり呻き声を上げると少女の顔をめがけて熱く濃い迸りを放出した。それは少女の顔をにかかり鼻先から右頬を汚していた。
「あああ、由香ちゃんの顔にかけちゃったよお……。ああ、たまんねえや」
少女はそれに汚れたままそこに座り込んでしまった。

男たちは少女の服を脱がそうといきなり手をかけ始めた。少女は必死にそれに抵抗をしようと手足をばたつかせ体をくねらせた。それは予想以上の抵抗で男たちはそれに弄ばれていた。業を煮やした一人の男がいきなり少女の頬をパンと張った。
「うるせーんだよ！黙れ」
少女は驚きで体を硬直させた。それを良いことに少女の服を少しずつ脱がし始めた。少女はそれに体をがくがくと震わせ小さな悲鳴を上げるだけだ。
「やっぱり子供の肌はすべすべして気持ち良いぜ……」
その男は少女の肌の感触を味わうように露わになった首筋から肩にかけて指と舌を這わせ始めた。少女はその感覚に短い悲鳴を上げていた。
「へへへ、こんなものがランドセルの中にあったぜ。こいつで動けないようしてから犯ろうぜ」
ランドセルを漁っていた男はそれから縄跳びを取り出した。それを使い少女の上半身の自由を奪うように腕を後ろ手に縛り、小さく薄い幼い胸を強引に隆起させるように拘束した。
「痛いよお……」
少女は微かな声を出して男たちを見つめていた。しかし、露わになった下腹部を片方の男に熱くぬめぬめした舌で舐められ快感の声を漏らしていた。もう一人は限界までに硬く反り返った陰茎の先端で少女の胸を犯すように捏ね繰り回していた。少女は思わず熱いため息を漏らしてしまう。
「そろそろいいか……」
今まで少女の下腹部を責め立てていた男は、そのまま押し倒すと幼い愛液で濡れそぼった陰部を一気に貫いた。少女はその瞬間、体を反らし悲鳴を上がる。
「いやあああ！」
「さすが輪姦されたことがあるだけ簡単に入るぜ……。そのくせ体が小さいからすげえ締め付けてくるよ……もう出ちまいそうだ。いいや、中に出してやれ」
「オイオイ、次は俺の番だぜ綺麗に使ってくれよな」
少女は幾度となく男たちに貫かれ、膣内にさんざん精液を出され満たされてしまう。それは幼い肉襞から溢れ、体は脱がされかかった服ごと精液で汚されていた。男たちは満足したのか少女の戒めを解き服を着させた。
「解ってると思うけど誰にも言うなよな……」
少女は今後どうなるのかという不安に駆られながら体の中に再び生まれ始めた何かに慄きながらその言葉にこくりと頷いた。

4日目

夕方の公園の雑木林から少女の叫び声が微かに聞こえてくる。しかし、人もまばらでそれに気が付くものは誰も居なかった。

「やだ、やだ、止めて下さい！」

少女は太い幹を持つ木に服もぼろぼろの状態のまま大柄な男によって押さえつけられてきた。男は興奮しているのか激しい息遣いで少女の露わになっている下腹部を乱暴にまさぐっていた。少女は苦痛に体をヒクヒクと細かい痙攣を繰り返す。

「あああ、由香ちゃん最高だよ！ネットで見るより可愛いね……。わざわざ遠くから来た甲斐があったよ……。由香ちゃんが可愛いからオレのチンコもこんなになってるよ」

男は少女の薄い太腿にその先端を押し付け腰を動かす。その先端から溢れる液体がナメクジが這ったように少女の太腿を汚していった。その気色の悪い感触に少女は足を動かし逃れようとするが、それは男の欲望の塊の一つである陰茎を刺激するのは十分であった。

「由香ちゃんが俺のことを気持ちよくしてくれるんだ……。すごく積極的なんだね……じゃあ、そろそろいいのかな？この前、由香ちゃんが犯されたように俺も犯してあげるよ！」

「あああ、そんなつもりじゃない……。やだやだやだ、もうやだの！やだあ！」

興奮した男は構わず小さな性器を指で広げるとそれとは正反対の大きく嫌な臭いのする陰茎を力任せに挿入していく。男は、満足気な声を出すとさらに快感を貪るために腰をゆっくりと使い動き始めた。

「ああああっ。痛い、痛い、痛いよおお！」

少女は目に溜まった涙をぼろぼろとこぼしながら背筋を反らしながら叫んでいた。

「何が痛いだよ！二人がかりで犯されていたくせに。ほら、やってればだんだん気持ちよくなってくるから我慢してろよ！」

「ああ、そんなのいやだぁ……」

少女は抵抗を示すが体に走る苦痛と新しく体内に生まれつつある小さな快感のためにその抵抗は次第に弱まっていく。男の動きに委ねるように力が抜けて体が上下にがくがくと揺れるだけになっていた。

「何だ、もう抵抗も終わりかよ……。じゃ、このまま俺のザー汁を中に出してあげるからね」

少女の腰を掴み、その小さな体を突き上げるように腰を密着させて男は少女の中で果てた。

少女は木の下に崩れ落ち、満足した男が立ち去るまでその場でただ呆けていた。

5日目

少女が帰りを急ぐ道、突然外国人五人に囲まれてしまう。少女はそれを避けようと歩くがその外国人たちはそれを邪魔するように道を塞ぐ。
「邪魔だから通してください……」
少女は懇願するがさすがに言葉も通じず、外国人はただ少女を眺めているだけだ。そのうちの一人がポケットからおもむろに紙を開くと妙なアクセントで日本語らしい言葉を読み出した。
「ワタシタチハ、インターネットデアナタ、ユカタナカガレイプサレルコトヲ、キボウサレテルコトヲシリヤッテキマシタ！ニホンジンノコドモサイコウデス！ユニフォーム&ランドセル、ワタシタチモニホンジントオナジヨウニコウフンシマス！ユカ、アナタハワタシタチニレイプサレルデス。ワカリマシタカ？」
一方的にそれを読み終わると外国人たちは少女を捕らえ、計画的に探しておいたのか死角になりそうな公園の茂みの中へと連れ込んだ。

一人が力任せに少女を突き飛ばす。ばさっと茂みが揺れ、少女は仰向けに倒れてしまう。ランドセルを背負ったままのためか腰をせり出す形になり外国人たちにとっては誘っている様子に見えたらしく興奮した様子で次々に少女に襲い掛かる。一人の男は乱暴にスカートと下着を剥ぎ取り下腹部に舌を這わせる、また、歓喜の声を上げながら少女の胸元に手をかけ制服を縦方向に千切り破りまだ未発達の小さな胸を揉みしだき乳首を指先で焦らすように責めるもの、もう我慢できないのか己の勃起した日本人ではありえないくらいに大きく反り返った陰茎を無理矢理握らせ扱かせる。少女を無視して飛び交う外国語は理解できるはずもなく少女をさらに困惑させていた。
ひとしきり少女の下腹部を舐めていた男は満足そうな笑みを浮かべ少女に自分の勃起した陰茎を見せ付けた。
「ひっ、そんなのいやだ……やだぁあ……あああっ！」
抵抗の声を上げるが通じるわけもなくその男は自分の唾液と溢れて出てきた愛液に混じった肉襞に押し付けてゆっくりと腰を落としていく。ズンズンと下腹部に響く感覚に少女は目を見開きか細い悲鳴を上げていた。
少女は、外国人たちに翻弄されただ犯されそれが終わるのを待つしか無かった。

RAPE TOUR

6日目

少女は学校に通うのに毎朝ラッシュの電車を使っている。少女はそれがうんざりで仕方が無い。駅の構内で人ごみを見るだけでげんなりとしてしまう。

今日も少女は、ゆううつな気分でホームで電車を待っていた。少女にとってはいつもの日常に過ぎないはずだった。しかし、その日は少女を狙う男たち数人がマークするように背後に並んでいたのだ。そんなことにも気が付かず、少女は到着した急行電車に乗り込んでしまう。背後の男たちも少女の後を追いその周りを囲むように乗り込んできた。

(あーあ、今日も混んでるなー。いつもより混んでるかも。いやだなー。急行だから全然止まらないし……。早く着かないかなー)

少女は心の中で呟きながら周囲を見回していた。そのとき耳元で囁く声が聞こえてきた。

「君が、由香ちゃんだよね?」

少女は思わずそれに反応してその声のする方向を見てしまう。その少女の動きを合図に男たちの手が幾本も少女の体にめがけて伸びてきた。少女は思わずビクンと体を捩じらせ逃げようとするが余りのも混雑のためまともに動くことも出来ずに、近くにあるパイプを掴むのが精一杯の行為だった。

「電車の中で触られるのって初めて?ネットで見ているけど由香ちゃんここ最近ちゃんとイってなさそうだから俺たちが電車の中でイかせて上げるよ。急行だしなかなか止まらないから由香ちゃんも楽しみだろ」

(いやだ、電車の中なんて……気持ち悪いよ……)

少女の気持ちを無視するように男たちの手の動きは次第に大胆になっていく。ゆっくりと小さなふくらみのある胸へと伸び制服の上から揉み始める。布地の感触を利用して人差し指や親指でその頂をそっと刺激を加えだんだん硬く尖っていくのを楽しむ者、少女の薄いもの感触を味わうように手のひらで執拗に撫ぜまわす者、小さなお尻をスカートの上から掴むように多い薄い肉の感触を味わう者、それらはランダムに動き少女の感覚を翻弄するには十分なものだった。そして一人の男の手が少女が最も感じるであろう下腹部へと伸びていく。下着の上から人差し指でなぞる様に撫ぜまわし始めた。

「んっんん……」

少女は声が出そうになるのを噛み殺していた。次第に顔は赤く染まり、何かを我慢するように足を震わせている。

「由香ちゃん、電車の中で痴漢されているのに感じているんだ?凄く乳首が硬く尖ってきたよ。ほらこれはどう?」

胸を責め続けていた男は制服の裾をたくし上げ直接少女の乳首を嬲り始めた。指先で摘みその硬さを味わうようにゆっくりと擦りたて、爪弾く。そしてその周囲の微妙に柔らかい胸を手のひらで覆い撫ぜ上げるように揉みしだく。少女は軽い悲鳴をあげ体を反らす。

「由香ちゃん声を出したら大変だよー。もっと他の人に知られちゃったら痴漢だけじゃすまなくなるかもね。それに、胸が感じるみたいだね。下着もなんか汗以外のもので濡れているみたいだよ……。これ以上濡れちゃうとまずいから下ろそうねー」

男の手が乱暴に下着を下ろし露わになった少女の下腹部を直接指先でいたぶり始める。触って欲しそうに震える小さな淫核を人差し指の腹で捕らえ転がし始める。幼い肉襞の中からは幼い甘い匂いをもつ愛液が溢れ男の指を汚していた。

「はぁ、あっあっ……あっ」

少女は体中から生まれる快感に耐えるように唇をかみ締めパイプを強く握り締めた。しかし、体は激しく痙攣を繰り返し、顔はさらに赤く上気し閉じている目からは涙がにじみあふれ出ていた。

「もう由香ちゃんたまらないみたいだね……。そろそろ駅に着いちゃうから我慢しないでイかせてあげるから」

耳元でいやらしく囁くと男たちの手はさらに激しく少女の体を犯すように這い回りはじめる。少女はガクガクとその手の動きにあわせるようにくねらせて小さな悲鳴を絶え間なく上げていた。

「もう、もう、もう許して……」

消え入るような小さな声で少女が懇願する。もう我慢できないのか片手で口元を覆い甘い吐息を漏らしていた。

「それじゃ、これで終わりだ」

少女の硬く勃起した淫核を弄んでいた男はそれを指先で軽く抓るように摘んだ。散々男らの手によって焦らされた体にとってその刺激は少女を絶頂に導くには充分なものだ。

「んっんんんん」

少女は背筋を凍らせると呻き声を上げた後にふっと体の力が抜けその場に崩れようとしていた瞬間に駅に到着して人の流れに飲まれるようにホームに押し出されてしまった。

7日目

「田中。放課後、理科実験室に来てくれ。ちょっと手伝って欲しいことがあるんだ。いいか？」
五時間目の授業の終わりの間際、教師が少女に言った。少女も疑うことなくそれに応える。
「じゃあ、待っているからHRが終わったら来てくれよ」

「失礼しまーす。田中です、先生」
少女が理科実験室に現れた。その教師はそれを持っていたかのように近寄る。
「ああ、田中、来てくれたか。とりあえずこっちに来い。こっちだ」
その声に導かれるように少女はその教師の方へ歩いていく。そして、その教師は少女の肩を両手で掴み少女の耳に熱い吐息をかけるように囁いた。
「先生も見てしまったんだ……。今から田中の体で実験するから手伝ってくれよ」
そう言うか言わないか瞬時に少女の両手を後ろ手に掴むと用意していたロープで器用に縛り有無も言わずに机に少女を寝かせてしまう。
「せ、先生！な、何をするんですか？こんなの止めて下さい！」
「何々、これは実験なんだから安心しなさい……。じゃあ、とりあえず動けないようにな……」
足を強引に開かせると両方の足首の自由を奪うようにロープで柱にくくりつけ、少女の股間を覆っている下着を乱暴に鋏で切り刻んでしまった。
「はーん、何度も犯されているのに田中のここは綺麗なもんだな……」
「も、もう……こんなの……先生」
少女は逃れようと必死に体を捩じらせるがどうにもならないでいた。自由が利かないのをいいことに教師の指は少女の幼い淫核を刺激するように擦り立て始めた。次第に少女の体は反応してしまい、そこからはじわじわと甘い少女の匂いのする愛液が溢れ始めてきた。少女の顔は上気し声をただ上げるだけだった。
「さて、これからが実験なんだよ……」

「そーれ一本、二本……何度もやられているだけあって結構解れているんだな」
「せ、先生止めて下さい！やだあ、怖いよお」
「力抜かないと中で試験管が割れて使い物にならなくなるぜ、大人しくしろよ。それでも騒ぐんだったらこのフラスコに入っている硫酸を垂らすぜ。勉強のできる田中だったらどういうことか解るよな？それに、お前、試験管を突っ込まれるたびに体をヒクヒクさせて甘い声を出して感じているんじゃないのか？実験体がそんなんじゃ困るよ。ネットのウワサ通りに類希に見る変態小学生だな」
教師の手は休むことなく少女の幼い性器に試験管を突き刺していく。さすがに五本も挿すとそれ以上入りそうな隙間もなく諦めた。少女は恐怖と息苦しさに声を殺し浅い呼吸を繰り返していた。
「ふーん、五本が限界かなるほどな。こっちはどうなんだ？」
そういうと、その試験管を少女の肛門へと近づけた。そこは肉襞から溢れる愛液によって濡れそぼり淫猥な光を発していた。その光景に教師は息を呑みながらゆっくりと一本の試験管を捻じ込んでいった。
「くはぁぁぁぁ……。そんなところは……やだぁ」
初めての感覚に少女は思わず今まで違った声を漏らしてしまう。
「なんだ、田中。お前こっちはまだ経験がないのか？一本でこれだけきつそうだしな……。どれ、もう一本くらいどうだ」
無理矢理広げるともう一本試験管の先端をじわじわと押し込んでいく。少女の小さな肛門はそれを次第に受け入れるかのように中に入り込んでいく。少女は初めての感覚に戸惑いながら声を上げ自由にならない体を捩じらせていた。
「た、田中……お前……エロイな、先生ちょっと我慢できないよ……」

『五年三組の田中由香さん。担任の山形先生がお呼びです。至急社会科準備室に行ってください』
その理科の教師が少女に襲いかかろうとした瞬間に校内放送が入った。教師は舌打ちをすると残念そうな表情を浮かべ少女を拘束した縄を解き始めた。
「まあ、田中解ってるだろうな。他の男たちにも言われているだろうが、そういう事だからな」
少女はほっとした表情で小さく頷きその場から立ち去った。しかし、絶頂を迎えることも出来ずに体の中に火照ったものは残ったままだった。

ひっく
ひっく
ガチ
とろ…
ガチ

7日目

「失礼します。山形先生」
少女は先ほどまでの行為を隠すように静々と中に入っていった。そこには一人の教師が座っていた。
「ああ、田中か。遅かったな。社会の教科書を出してこっちへ来い」
「あ、ハイ……」
少女はランドセルから教科書を出すと教師の前へ立った。
「田中は、社会科以外は出来るのに、社会だけはからきしだめだからなぁ……。とりあえず室町時代のページを開いてみろ。九八ページだ。で、そこ読め」
「あ、は、はい」
少女は慌てて後ろを向きながら教科書を捲っていった。そのとき背後にいた教師がいきなり少女の腰を掴むとぐいと自分の腰へ引っ張り込んだ。その教師のズボンはいつの間にか脱げ、反り返った陰茎が透明の液体をあふれ出しながらヒクヒクと息づいていた。それが少女のスカートを通して伝わっていた。
「せ、先生、何?」
「何ってわかってるだろ?どう隠したって知ってるんだよ。それに、理科の河口先生には悪いけど判っていてお前を呼び出したんだよ。こっちの手間が省けるってもんだ。んじゃ、このままいくぞ田中」
スカートをたくし上げると後ろから座ったまま少女の中に陰茎を捻じ込んでいった。さっきまで理科室で責められたせいかあっさりとそれを受け入れてしまう。熱い塊の感覚に少女は戸惑い細かな喘ぎ声を漏らしてしまう。
「なんだ、田中。お前の体はこんなに開発されてんだ。いきなり大人のペニスを挿し込まれて嬉しそうな顔をしてるんだもんな。担任のオレは悲しいよ、こんな淫乱な児童を持ってさ。もっと子供らしくしろよな」
「そ、そんなことない……」
少女は必死に、その責めに耐えるかのように唇を噛み声を殺した。しかし、その行為を嘲るかのように教師の指先は服の上からつんと尖っている乳首を探り当て布の上から一気に抓り上げた。
「ああ……はぁぁ……」
乳首の強烈な刺激ももはや快感の一つになっているのか少女は激しく体を震わせ歓喜の声を漏らす。
「おお、すげえ締め付けてきやがった……。ただでもきついのによ……。中に、中にたっぷりと出してやるから受け止めろよ!」
少女は股間からだらだらとだらしなく精液を流しながら先ほどまで犯され続けていた椅子にぐったりと座り込んでいた。

「それじゃな、田中。ちゃんと社会の勉強をしておくんだぞ。テストで悪い点数だったらまた犯すからな……。ああ、犯して欲しいからって悪い点数を取るのは無しだからな。じゃあ、早く帰れよ〜」
教師は無責任な笑い後をあげるとその場から去っていった。

ビクッ
はぁっ
はっ
新しい社会科
すりすり

8日目

「なぁ、由香いいだろう？オレこの間ネットで見ちまったんだよ。お前がオナニーしながらチンコ欲しいとか、犯されているのをさ……。知らない男ならオレでもいいじゃんか。兄であるオレがお前のことを犯してもさ」
自宅のリビングで息を荒げながら妹である少女を強引に床に押し倒し力任せに制服を胸元から破り去った。布の破ける乾いた音が、本来は家族の団欒であるべきリビング中に響き、それを追いかけるように少女の悲鳴が上がった。
「お、お兄ちゃん！やだやだ、こんなのいやなの……」
少女の必死の声を無視するように、露出した小さな胸の先端を唇で含み指先で軽くつまみ始めた。未成熟の胸はその拙い技術の愛撫に反応してしまいその先端は次第に口の中と指の中で硬く尖り、それから生まれる感覚に細かい声を漏らしてしまう。
「あっ、あっお兄ちゃん……。も、もう、いいでしょ……」
しかし、無言のまま飽きることなくその幼い胸を責め続けていた。少女はその行為に体を捩じらせていた。

8日目

「由香、オレ、我慢できないよ……。他の男のようにオレのチンコを舐めてくれよ。頼むよ」
少女を起こすと、限界まで硬く反り返っている若く青臭い陰茎を口に届くように差し出し少女の頭を掴んだ。少女はもはや抵抗することをやめ、小さな手でその熱く震える陰茎を掴むと唇でその先端を包み込むように吸い、小さな舌を出しそれを舐め回し始めた。その男は初めての感覚に声を出してしまう。
「ゆ、由香。だめだよ。すごく気持ちいい……。あああ、もう出る……。このまま出すから飲めよ」
男は両手で少女の頭を掴み先端を小さな口に押し付けるとくぐもった声を出しながら熱い精液をそのまま口内と喉の奥を満たすように注ぎ込んだ。その臭いと味に涙目の少女の口の端から唾液に混じった精液が糸を引くように垂れ落ち床を汚していた。

8日目

一度出したくらいでは満足できないのか、その男は乱暴に少女を押し倒した。少女は体に走った痛みに呻き声を上げる。しかし、それに構うことなく乱暴に制服を剥ぎ取り背後から腰を掴むと一度果てたくらいでは収まらなく強張ったままの陰茎で幼い性器にあてがい力任せにそのまま貫いていた。

「ひあっ、痛い、痛いよ、お、お兄ちゃん！」

「何が痛いだよ！今まで散々いろんな男のチンコを銜え込んできたんだろ！俺のでもいいじゃねえかよ。オレの初めてがお前なんだから有難く思えよ！」

男は身勝手な理由を叫び、自分の欲望だけに忠実に腰をぶつけ少女の体の中に何度となく注ぎ込んでいた。少女はただうわごとのように「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と力なく声を出し、ときおり体を引く引くと痙攣させるだけだった。

「はぁはぁ……。由香……スゲー良かったよ。これからもたまには頼むな。それから片付けておけよ。母親にばれるとお前もまずいだろう」

満足した男はその場、崩れている少女に言うと自分の始末だけしてさっさと自分の部屋へと戻ってしまった。

9日目

一日の授業が終わり少女が帰りの身支度をしていると、少女の机の前にクラスメートである二人の少年がやってきた。三人は笑い声を上げながら他愛もない会話を繰り返していた。それは少女にとって久しぶりに楽しく、ここ最近の非日常的な行為を一瞬忘れるには十分の時間であった。
そして、教室にこの三人以外誰もいなくなったとき、それを待っていたかのように一人が口を開いた。
「田中さあ。お前、可愛い顔してスゲェんだな。オレ、驚いちゃったよ。この間、家のパソコンで見ちゃったんだ」
「あ、オレ学校で、担任の山形とやっているのを見た。と言うより、山形から聞いた」
少年らは口々に少女に向かって言い放ちランランとした目で少女を眺め今にも襲いかかろうとするくらいの勢いだ。少女はその状況とクラスメートに知られてしまったと言う事実に驚き、顔を真っ青にさせながらその場から逃れようと立ち上がった。しかし、その瞬間に一人の少年が少女の背後に回り逃げられないように両方の腕を後ろ手に掴んだ。
「逃げんなよ。いいじゃん俺たちに教えてくれよー。あ、そうだ、教室から逃げられないように下を脱がしちまおうぜ」
「ああ、そりゃいいや」
「い、いやぁ。止めて、谷川君……」
少年はその声を無視し、指先でスカートのフォックを探り当てるとそれを外してしまう。少女の下半身を覆っていたスカートはあっさりとその足元に落ちてしまう。
「み、見ないでぇ……。お願い、お願い」
必死に懇願するが少年二人はその光景を笑いながら眺め、股間を隠している下着をもカッターを使い剥ぎ取ってしまう。
「田中は下半身つるつるなんだ〜。へぇ、女ってこうなってるんだ。そう言えば家で兄ちゃんのビデオ見たときにここを触ると女って気持ちよさそうな声を出していたけどどうなんだ?」
「なんだか汚くね?お前試してみろよ」
少年らは、新しい玩具を得たような感じで体を震えさせている少女を目の前ではしゃいでいた。そして、その背後の少年が少女の股間へと指を伸ばしていく。
「やだ、やだ、ね、ね、林君。もう許して。お願いだから」
「んーこの辺かな?なんか、ここちょっとコリコリしているぞ?」
少女の懇願を無視し、少年の指先は幼い肉襞を掻き分け小さな淫核を探り当ててしまう。それに、触れた瞬間に少女の体はビクンと電気が走ったように軽い痙攣を繰り返した。
「お、おもしれぇ……。ここに触っただけで田中の体がビクビクしてるぜ。ほらほら」
少年の指が激しく淫核を突っつく。そのたびに体が仰け反り呻き声を出しながら、その指の動きにあわせるように腰を動かしていた。
「ふぁあっ、ああ、あああ……」
「田中、なんだかHな声出してんな……。オレもおかしくなりそ」
少年は硬く尖った淫核を弄ぶように指の腹で転がし始める。少女は泣き声の様な悲鳴を上げていた。その少年の指には次第に少女の中から触れ出てきた愛液がまとわり付き始めクチュクチュとした音を立て始めていた。
「なんか、変なものが出てきたぞ……。気持ちいい証拠だって兄ちゃんに聞いたことがあるけど、おい、田中、どうなんだ?」
「はぁぁぁ、そんなの言えないよ……。も、もういいでしょ……」
少女は羞恥に顔を赤らめながら体を震わせるだけだった。
「おーい、林。面白そうなものを見つけたぜ!これ入れてみようよ。このくらいは入るんだろ?」
「あ、それ、激しく面白そう。採用!」
その少年の手には太いリコーダーが握られていた。
「あああ……。そんなの……や、だ」

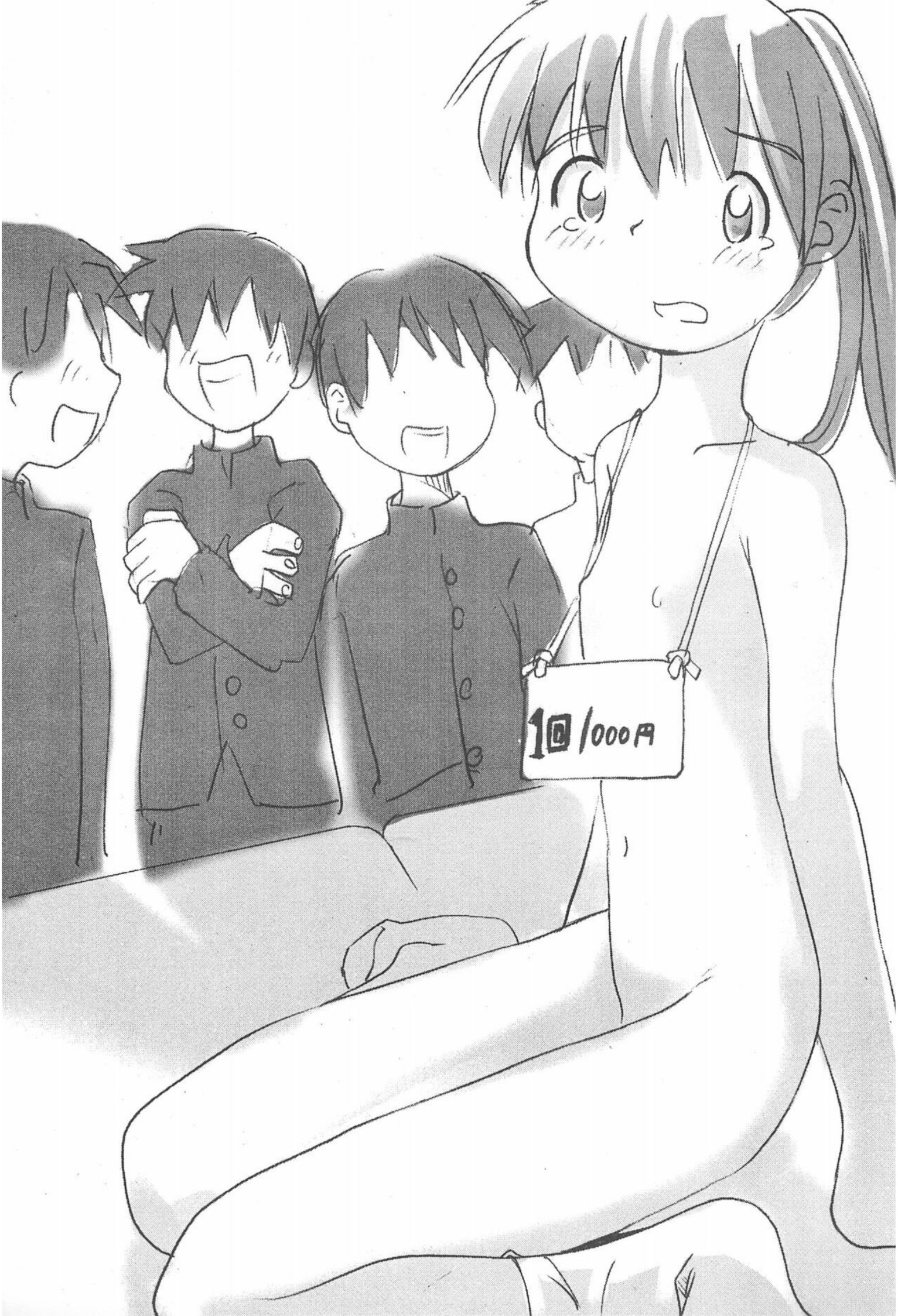
9日目

「うお、結構簡単に入っちゃったよ。笛の先を入れた瞬間に田中もスゲー嬉しそうな声出してるし」
少女の肉襞を掻き分けるように捏ね回すようにしながらその中へと笛を捻じ込んでいく。少女は声にならないような悲鳴を上げながら体をくねらせてそこから生まれる快感に夢中になり始めていた。
「もう、こいついっちゃってるよ。ああ、オレも我慢できないよ。田中、ほら、オレのも良くしてくれよう」
笛をねじ込んでいた少年は、いきなり少女の手を掴むと勃起した陰茎を握らせる。少女は一瞬躊躇するが少年に促されるままそれを扱き始めた。
「ああ、田中の手が柔らかくて気持ちいいぜ……。ほら、もっとしてやるからちゃんと擦ってくれよ」
少年は快感に身を震わせながらさらに少女の中を犯すように笛を激しく動かしていた。少女もそれに応えるように嬌声を上げてしまう。
「なんだよ、俺も仲間に入れてくれよな……」
もう一人も己の勃起した陰茎を無理矢理少女に握らせる。少女は快感のために上手く握れず仕方なく少女の手を掴み陰茎の先端を包み込むように掴ませ自分の腰を使いそれに刺激を加えていた。
「ふぁぁっ、出ちゃう出ちゃう、出ちゃうよお！許してぇ」
少女は大きな声で叫ぶと我慢できなくなったのかがくがくと腰を揺らしてその場で漏らしてしまった。その自分の姿が信じられないのか放心した様子で自分の姿を見ていた。少年たちもその少女にめがけて大量の精液を放出していた。

「田中、ちゃんと掃除しておけよ。じゃあ、また明日な」

10日目

「おーい、みんなー集まれ～」
昨日少女いたぶった少年二人が放課後クラスメイトの男子に声をかけていた。その、取り囲む、その中心には全裸に首から一回千円と言うプレートを提げた少女が机の上にへたり込んでいた。その様子を他の男子児童は驚いた表情で眺めていた。
「田中が？」「一回千円って？」「うわー」
少女に対して男子たちは騒ぎその声を聞き少女は恥ずかしそうに身を縮めていた。
「えー田中さんはチンチンがすごく欲しい小学生らしいんです。で、クラスメートがそれで困っていますので皆で手伝ったらと思って集まってもらったわけです。皆さん協力していただけますか～？一人千円でーす」
十数人といた男子が少女の周りに千円札や小銭を置いて、今にも襲い掛からんとした視線で少女を見つめていた。


1回 1000円

10日目

いきなり一人の体躯の良い少年が少女の中に荒々しく圧し掛かり早くも犯し始めた。それを皮切りに何人もの少年が少女に襲い掛かる。
「そ、そんなに一度に……うああ」
少女のか細い悲鳴をかき消すようにもう一人が頭を掴み小さな口を強引に犯し、穴にあぶれた少年たちは少女が犯される姿を見ながら自分自身で順番が来るまで扱いていた。
「こいつすげえ乳首ガチガチでやんの！悦んでるぜ、コイツ」
背後から手を回して少女の胸を揉みしだく少年はさらに激しく乳首を抓り引っ張る。それによって少女ががくがく震え、くぐもった悲鳴を上げる様子を満足げに眺めていた。そして、自分で扱き始め我慢し切れなかった少年はそのまま少女の体にめがけて熱く青臭い液体をかけ汚し始める。少女は口を塞がれ声を出すこともできず、体の自由も利かないままただ少年たちに嬲られ輪姦され続けていた。

「オレで最後か、目一杯、田中の中に出してやるからな！」
最後になった少年は少女の腰を掴むと一気に大量の精液を放出した。それは、他の少年の精液と交じり合い音を出しながらゴポゴポと溢れ出して来ていた。

「ああ、田中スゲー気持ち良かったよ！これからもヨロシクな」
少女の耳にはその言葉も届かず、精液で汚れた体を横たえ机の上でうつろな視線をさまよわせながら肩で息をするのが精一杯だった。

10,000円

11日目

「おい由香、ちょっとこっち来いよ」
授業が終わり、大柄な男に呼び止められた。同じ学園の高等部に通う兄だ。
「あ、お兄ちゃん何……？」
無言のまま少女の腕を掴むと引きずるように校舎の裏手へ連れて行った。
「お前、クラスメートの連中に金をもらってやらせているみたいだな……。話は聞いているぞ。だらしのないやつだ。自分の性欲も抑えられないのかよ」
蔑む様な目で少女を見ていた。その言葉に少女は体を震わせ涙を流しながら必死に応える。
「そんなの、そんなの……違うって！私、私……」
「違うって実際金をもらってんだろ！一回千円だって？本当に仕方のない妹だよ。そんなにチンコが好きだったら、俺が用意してやるよ！」
その言葉を合図にぞろぞろと学生服を着た男たちが現れた。二〇人くらいは居るだろうか、それが少女を取り囲む。その男たちは品定めをするように眺めていた。
「お、おい、いいのか田中？お前の妹だろ。俺たちで輪姦しちゃってよぉ。確かにこんなのと犯れる機会っていうか、セックスするのも初めてだから俺たちも犯りたいけどよ」
「いいんじゃねえの。こいつも犯して欲しいみたいだし……。お前ら犯るんだったら一人千円な。幼年部の連中ですら払ってんだからちゃんと払えよ！」
「じゃあオレからな！」
そう言うと有無も言わずに少女に壁に手を付かせ背後から腰を掴んで、一気に貫き始める。
「おう、スゲー気持ちいい……。小さいオマンコがグイグイ締め付けてくるぜ……。ほらほら、どうだ、由香ちゃん。気持ちいいのか？」
息を荒げながら男は腰を激しく動かし獣のように少女を犯す。少女の体はそれによって壊れた玩具のようにがくがくと揺れていた。
「お兄ちゃん……お兄ちゃん……。た、すけて……あ、ああ」
少女は犯されながら傍らに立っている兄の姿を虚ろな視線で見つめ助けを求めようとしていた。しかし、その声を無視をしてただニヤニヤと眺めているだけだった。
「このランドセルを背負ったままって言うのがいいよな。小学生を犯している感じがして最高だぜ！ああ、もう出るわ。由香ちゃん中に出したあげるからね～」
さらに深く貫くために腰をさらに押し付け腰を引き寄せる。そして体を震わせると劣情の塊を少女の中に染み付けるように吐き出した。
「じゃあ、次ぎオレな」
「お、おいこれで何人目だ？」
「わかんなくなっちまうから太腿にマジックで記し付けてあるだろうが。今で一七人目だよ。あと、五人くらいか。後五人だってよ由香ちゃんって完全にいっちゃって何を言っているかわからねえか」
股間から精液が溢れ出し呆然としている少女に残った男たちが挑みがかって行く。少女はときおりヒクンと痙攣するだけだった。

正正
丁正

12日目

母親に体調が悪いと仮病を使い少女は学校を休んでいた。母は仕事に出かけ、兄は学校に行ったので休めば誰にも会うことも無く乱暴をされないと思ったのだろう。自分の部屋でゆっくりと過ごして一日が終わる予定だった。

『ピンポーン、ピンポーン』
玄関のチャイムが鳴り少女はリビングにあるインターフォンにでる。
「田中ですが。何か御用ですか？」
『あっ宅配便です。荷物をお届けに参りました。印鑑をお願いします』
「あ、ハイわかりました～。今行きますー」
少女は、ハンコを持って玄関先に向かう。そして、チェーンと鍵を開け扉を開いた。そこには宅配便の制服姿の男二人が段ボール箱を持って立っていた。その一人が箱を玄関に置き伝票を取り出し少女に差し出した。
「すみません、こちらに印鑑をお願いします」
「はい。あっ……」
少女は一瞬言葉を失った。本来伝票であるべきものが、ここ数日少女が輪姦、犯された画像が印刷されていたものだった。男たちはその少女の戸惑う様子を笑いながら眺めていた。
「由香ちゃんが学校を休むもんだからこうやって来たんだよー。ヨロシクな。昨日おとといの動画もネットに上げられていたけどスゲー興奮したぜ。でも、アレだけたくさんの人間に乱暴に輪姦されていたからてっきりまともで居られないかと思っていたけど結構元気じゃん。子供だから回復が早いのかな。まあいいや」
その場で凍りつく少女をもう一人がすばやく玄関を上がり少女の細い手を掴み逃げられないように動きを拘束した。もう片方の男は玄関を閉める。
「ここ数日でアレだけ犯されていれば結構イきやすくなってんじゃないの？」
「さあ、どうかね？」
そのまま男たちは少女を玄関先に押し倒していた。これだけ乱暴され続け少女は抵抗することなく時が過ぎるのをただ待つかのように体を震わせていた。そのおびえる様子を眺めながら少女が着ているものをあっさりと剥ぎ取っていく。両足を持って広げるとその奥には幼い肉襞がヒクヒクと息づいていた。それに顔を近づけゆっくりと熱い息を吹きかける。そして小さな襞を掻き分けるようにして舌をゆっくりと押し込んでいった。空いている指をゆっくりと動かし太腿を撫ぜ上げる。今までと違ったもどがしい感覚に少女は、いつも犯されているときは違った喘ぎ声を漏らしていた。
「お、結構感じているみたいだぜ……。乳首も起ってきたし」
少女の手を押さえていた男は、自分の勃起した陰茎を少女の目の前で扱きながら小さな乳首をつまみ転がし始めた。その刺激に少女は体を仰け反り甘い吐息を漏らしていた。
「へへへ、いい感じじゃん。俺もそろそろ我慢できないし誰か帰ってきたらまずいからやっちまうか」
さらに少女の足を広げると、下腹部を責めていた男はゆっくりと少女の中へとヒクヒクと脈を打つ陰茎を入れていく。それは少女の小さい性器とは不釣合いに大きくアンバランスな淫猥さをかもし出していた。
「ふぁあああ……。あああ」
少女は深いため息を漏らし体を捩じらせてしまう。
「何だ、こいつチンコで感じるようになってるのかよ！仕方のねえガキだな。俺は泣き叫ぶ姿が見てえんだよ！激しくやるからな！」
男は自分の劣情をぶつけるためにただひたすら激しく少女の小さな体にめがけて打ち付けていった。その激しい動きから生まれる苦痛に耐え切れず目を見開きその男が望むように泣き叫んでしまう。
「ほら泣き叫んでいる暇があるんだったらお前の目の前にあるチンコでも見てやれよ。次はアレがお前の中に入ってやるんだぜ」
少女の顎を押さえつけると無理矢理その扱き続けている陰茎の方へ視線を向けさせる。それは猛々しく反り返っていた。
「へへへ、由香ちゃん次は俺だからヨロシクな」

13日目

この日は雪がしんしんと降り続いていた。さすがにこれだけ天気が悪いと誰もいないのか、その隙をうかがいながら少女はその中をゆっくりと滑らないように歩いていた。

「由香、由香だろ」

少女を呼ぶ声が聞こえてくる。少女は、ああまたかというような感じのため息をついて振り返った。しかし、そこには少女の知る男が立っていた。

「あ、お父さん？お父さんでしょ！」

「ああ、父さんだ。よくわかったな。母さんと別れて以来会わせてもらえなくて、ずいぶん探したんだよ……」

少女は涙を流しながら久しぶりに出会った父親に抱きついた。少女は安心を求めるように力を入れて抱きついていた。

「お父さんはどうやって私がこの町に住んでいることを知ったの？」

気まずそうに一呼吸を置いて少女に言った。

「ああ、インターネットだよ。お前のいろいろな画像が出ていた判ったんだ……。ちょっとこっちに来なさい」

少女は驚いた表情のまま父親に公園の隅へと連れて行かれた。少女はそこで不安そうな表情を浮かべて父親を見つめていた。

「由香、ここで着ているものを脱ぐんだ……」

「え？お父さん冗談は止めて……うそでしょ」

「脱ぐんだ……。お前がどんなことをされたのか確かめてやるから。とにかく早くしなさい」

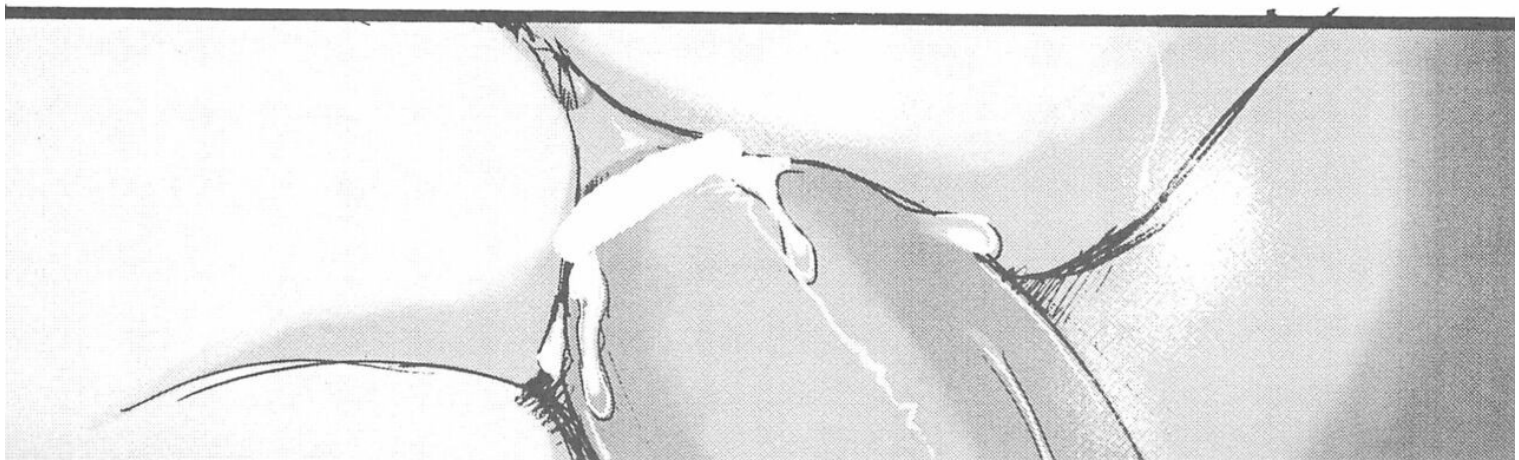
少女は、悲しみの表情で男を見つめた後その指示に従いコートや制服を脱いでいった。しかし、外は雪が降るほどの寒い気温。少女はがくがくと体を震わせていた。

13日目

「由香、このままだと寒いだろ。こっちに来なさい」
男はコートの前をはだけた。その中は全裸だった。少女は一瞬たじろいたが背を向けてその男へ近づいていった。そして余りのも寒さのためにコートを掴み自分の体を覆っていた。
「由香、父さんの体、温かいだろう?」
少女の冷え切った体は父親の体温によって次第にあたたくなり始めていた。少女は父親の体温に懐かしさを覚えたのか多少は気持ちが解れてきているようだった。
「ほら、父さんがもっと暖かくしてあげるからな」
そのとき、少女の下腹部に手が伸び小さな割れ目を探り当てるようにゆっくりと前から後ろへと擦り始めた。少女の中は外気と違い熱く火照り始めていた。そのもっとも熱くなっている淫核を指の腹で探り当てその感触を確かめるようにやさしく撫ぜるように転がす。その感覚に、甘く切ない吐息を漏らし体を反応させてその指の動きに応えていく。
「あああ、父さん、父さん……私……」
「もういいんだ由香。父さんが守ってやるからな……。今はただ父さんの指で気持ち良くなればいいんだ」
人差し指をゆっくりと中へやさしく進入させていく。少女は体をビクビクさせながら声を上げる。その声は雪に吸収され静寂が戻り、再び少女の短い息遣いがその静寂を破るように響き渡る。
「お父さん、由香の体、熱いよお。はぁぁぁあああ」
少女はその指の動きに耐えかねたのか、ひときわ大きな声を漏らすと股間から大量の愛液を流しながら男の腕の中で絶頂を向かえてしまった。

13日目

「由香、気持ちよかったかい?体は暖まった?今度は雪に負けないくらい暖めてあげるよ」
男は、絶頂に達し放心状態の少女を抱え上げると愛液で濡れる少女の肉襞の中へやさしくゆっくりと入れていった。その中に入っていく熱くて硬い陰茎は少女の体を暖めるように収まっていく。今まで、たくさんの男たちに犯され、身勝手な快楽を得るために貫かれていたのとは違い少女の体をゆっくりと包み込む男の動きは少女を安心させ、より深い快感を与えるには充分なものだった。
「お父さん……すごく暖かい……はああん」
少女は深い吐息をつくと身もだえするように体をくねらせ始めた。



13日目

「お父さん、お父さん……もう私だめかも……いきそう」
少女はコートに寄りかかり男の腕を掴んで自分の体を支えていた。男も、ゆっくりと動いたりときおり激しく動いたりを繰り返し少女により深い快感を与えるように慎重に少女の小さな体を責めていた。
「父さんもそろそろ限界だ……。このまま由香の中に出していいかい？」
「う、うん、いいよ、私の中に出して。お父さん私も、もうだめ」
コートの中で二人は抱き合うと体を仰け反りながらお互いの口を吸いながらその場で今まで以上の深い快感を得、その場で果てた。

少女が服を着ながら男を見ていた。その様子を優しい視線で見つめていた。
「由香、お前、このままじゃずっと犯されて壊れてしまうよ。実はここに来る前、母さんに会って今までのことを話して相談したんだ。由香、父さんのところに来ないか？もしまたばれたとしても今度は父さんが守ってやるから……」
男はボソボソと少女の耳元で囁いた。

少女は男を見つめると、一呼吸をおいてコクリと頷き抱きついた。

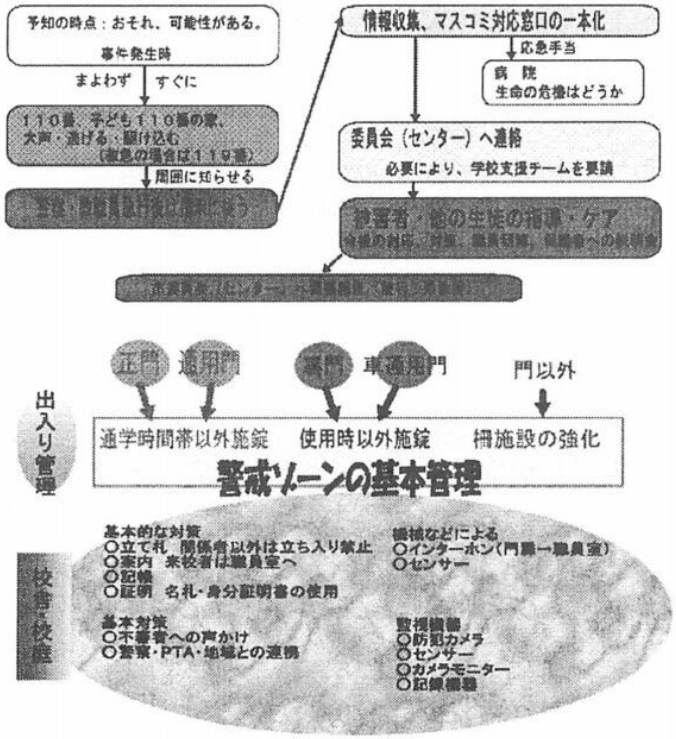
END

オリックス谷と女子柔道のアレの結婚記念

危機管理マニュアル

TEXT:和田

前回のろりぼんでは史上初のボツを喰らったわたくしですが（少女売春に潜入する生々しいルポ）、今回も懲りずに原稿を書いてます。さすがに２回連続でボツになる気は全くございませんのでどうでもいい内容（ＳＰＡ！の特集記事並の）で今回はお茶を濁そうかと思うところです。
あの小学校でアノ人が狼藉かましてくれたおかげで各教育委員会が様々な危機管理ガイドラインを作成しています。
無論僕らもその対象に入ってます。やったね!!



これらが件のマニュアルの一部です。
どうでしょう？穴だらけですね。
はっきり言って舐めてるとしか思えません。
僕らの様な社会不適合者がこんなポンコツマニュアル一丁で括られていいのでしょうか？

あ、ちなみに今回の原稿である危機管理マニュアルに関しては、小学校のものを紹介するものではありません。
僕たちの危機管理マニュアルです。
（ね、ＳＰＡ！の特集みたいだ）

そんなわけで僕たち日陰者にとっての危機管理というものは一体どんなものなのか？
どんな対策をとるべきなのか？を中途半端に書いてみます。
ちなみに既に捕まった人にはどうにもならない作文です。
あと、僕の住んでる選挙区から又吉イエスが出馬しました。
もちろん投票済みです。けど落選。あぁよかった。

フジTV、女子柔道のアレを「綺麗ですねぇ」発言した記念

危機管理マニュアル

職務質問されたら？

怪しまれない職業を言い張りましょう
植木屋です
測量屋です
東京ガスです
東京電力です
消防署の方から来ました
水道局の方から来ました。あれ、お宅の水道ダメですねぇ。この浄水器（以下略

殿様商売でおなじみの
東京[redacted]力キャラクター

不審者扱いされたら？

パントマイムで逃げ切る
風刺漫談で逃げ切る
山手線の全ての駅を言い放って感動させた後逃げ切る
常時装備しているトンファーで相手を滅多打ち
常時装備している三節昆で相手を滅多打ち

例１　パントマイム
という名の昔の裏本。
激しく間違ってます。

警察に捕獲されたら？

諦めましょう　人間ここぞという時の諦めが肝心です

実名、写真入りで報道されたら？

一躍有名人です。部屋の片付け等はバッチリ済んでますか？
あぁ、ほら、そこのヤバげな本とかは処分しておいてください。

刑務所にブチこまれたら？

幼女関係で入獄すると、刑務所内では最もいじめられやすいそうです。
ム所に入る前に亀仙人のトコで修行するなりして対策をしておきましょう。
キチガイじみた言動で周囲にウザがられるのも良い方法です。

出所後

まともな生活はできません。いっそ海外に行きましょう。見聞が広がる事うけあいです。

最終結論

迂闊に３次元には手を出さない方がいいですね。
話し掛けない、挿れない、擦わない、の非ロリ三原則を保ってください。

結局いつもの毒にも薬にもならない作文の羅列で終了してしまいました。
何せコレ書いてるのがクリスマスイブも過ぎた午前２時というだけでも勃起モンです。
次回はもっと違う視点でロリ考察がしたいです。今回やれよ。
ボツを喰らった少女売春に関してはもう少しマイルドに表現して、いづれこの本で。
ってこの本の責任者に何も相談してないですけどね。うふ。

あとがき

▼なんか暑くなったり寒くなったりで大変ですなー。とう言うわけで、今回は扉にも書いてありますように「かつて輪姦された経験のある少女(ポニーテール、セーラー服、ランドセル、５年生)がそれを元に襲われてしまう」という設定で、いろいろな作家さんにイラストを描いてもらって、後付けでテキストを挿入していこうって言うのをテーマにこの本を制作させていただきました。かなり時間的制約が厳しかったのでちょっとつらいところもありますが、それなりに楽しめる一冊にはなっていると思います。そういう設定のイラスト集としてでもよろしいかと（そっちの方がよいという話も）。

それから、今回は縁ありまして、やまの屋本舗さんと合同本という形になっています～。やまの屋さんのご協力は大変ありがたいことです。またヨロシクです。

それから実はこのサークル10年目でした(^_^;;って最近気が付いたのですが。

今回も変なスケジュールの中、執筆していただいた方には感謝しかありません。またよろしくお願いします。それから、この本を手に取っていただいた方にも感謝感謝。それではよいお年を。

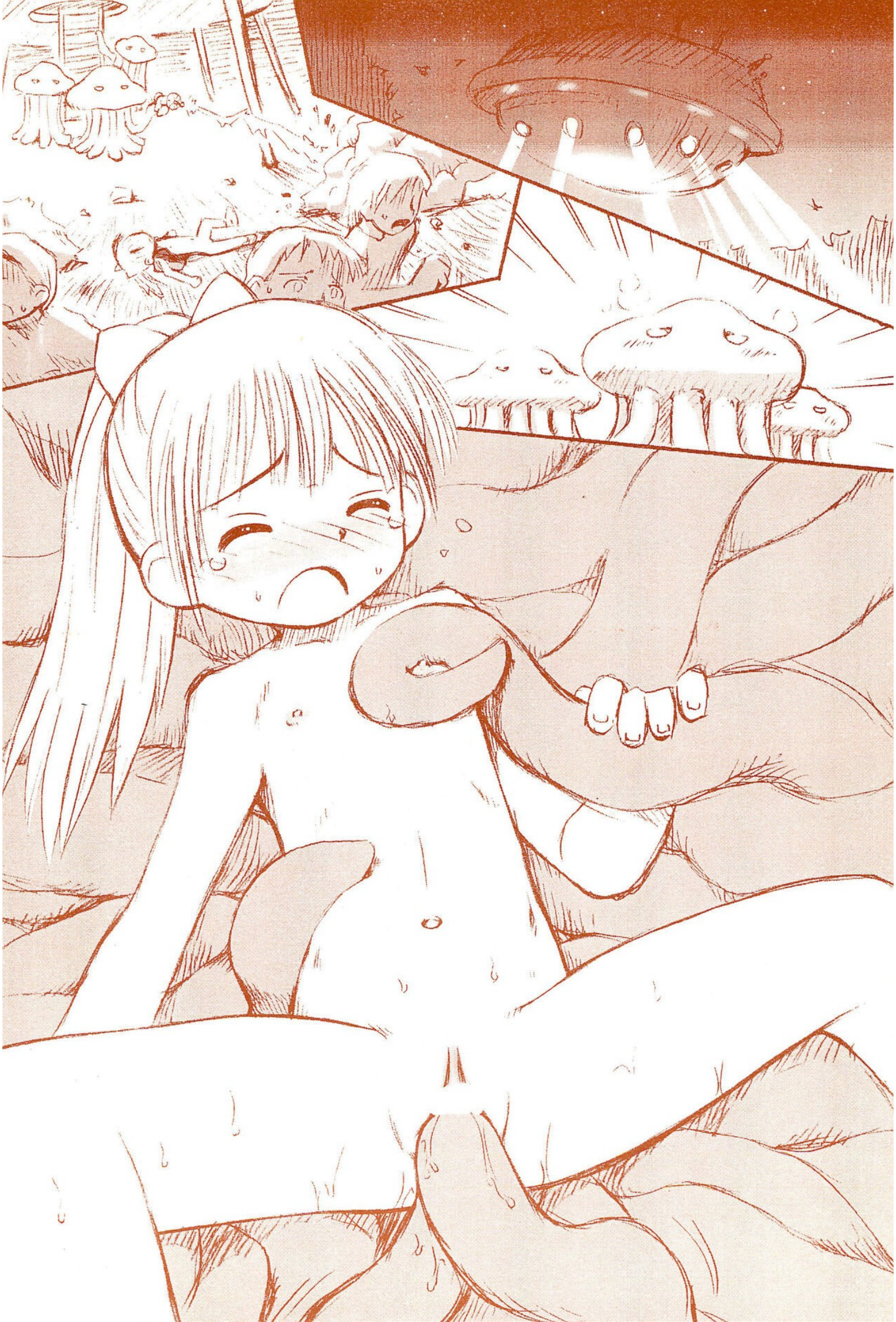
2003/12/26　にしの☆とーた

Contents

宮野あみか 03.05.21.23
まりの家電 09
満月ポン 10
ガビョ布 11
みはらじゅん 15.41
こけこっこ☆こま 17
山野紺三郎 19
栗東てしお 25-29
かにかに 31-37
いえ～い富井 39
てるき熊 43-49
東海太朗 テキスト

アパッチ和田 51

表紙イラスト　　山野紺三郎
こけこっこ☆こま

敬称略

おくづけ
発行日　2003/12/30
発行　ろくめん☆ろっぴ＆やまの屋本舗
印刷所　ロウバストプリント
do-kan@ma.neweb.ne.jp